

### 33. 外傷性頸髄損傷に対する高気圧酸素療法の有用性

朝本俊司\*<sup>1)</sup> 杉山弘行\*<sup>1)</sup> 土居 浩\*<sup>1)</sup>  
永山健太郎\*<sup>2)</sup> 松下賢一\*<sup>2)</sup>

〔\*<sup>1)</sup>都立荏原病院脳神経外科〕  
〔\*<sup>2)</sup>同 高気圧酸素室〕

【はじめに】我々の施設では、脊髄損傷に対し積極的に高気圧酸素（以下、HBO）療法を施行しているが良好な結果を得ているためここに報告する。

【対象及び方法】当科へ入院した頸髄疾患124例のうち、骨傷の無い外傷性頸髄過伸展損傷で手術をしていない37例のみを対象とした。37例のうちHBO療法を施行したのは16例（HBO群）でHBO療法を施行しなかったのは21例（非HBO群）であった。HBO療法は第2種装置（羽生田鉄工P-1000SE）を用い、2.0絶対気圧（ATA）、85分（加圧10分、平圧60分、減圧15分）の条件で1日1回、10日間を原則とした。24時間以内に治療を開始したのは7例で、最低3日間、最高33日間、平均12.9日間であった。HBO群16例の内訳は、男性13例、女性3例、年齢は24歳から87歳で、平均60.9歳であった。非HBO群21例の内訳は、男性14例、女性7例、年齢は13歳から88歳で、平均60.8歳であった。全ての患者の入院時神経学的所見及びoutcomeを、Neurological Cervical Spine Scale (NCSS) で評価し、その改善率を求め、HBO群と非HBO群の各々の平均改善率を比較した。

【結果】HBO群の最高改善率は100%、最低改善率は27.3%、平均改善率は73.8%であった。同様に、非HBO群では、最高改善率は100%、最低改善率は25.0%、平均改善率は65.1%であった。

【結語】1、HBO群は、非HBO群に比べ明らかに改善率が高かった。2、急性期外傷性頸髄損傷例に対するHBOの補助療法としての意義は、十分にあると思われた。

### 34. 高圧酸素療法で再建手術を回避し得た舌断裂患者の一例

渡辺大介\*<sup>1)</sup> 金子明寛\*<sup>1)</sup> 佐々木次郎\*<sup>1)</sup>  
小森恵子\*<sup>2)</sup> 山本五十年\*<sup>2)</sup>

〔\*<sup>1)</sup>東海大学医学部口腔外科〕  
〔\*<sup>2)</sup>同 付属病院救命救急センター〕

交通外傷で可動舌の2/3が断裂した患者に対し、舌断裂部の断端吻合と高圧酸素療法（HBO療法）を併用した症例を経験したので報告する。

【症例】42歳男性、就労中に交通事故に遭遇し、歯牙により可動舌の2/3が断裂した。シートベルトをしていたため、四肢その他は特に外傷を認めなかった。受傷後、救急隊員がフロントガラスに付着していた舌断端とともに患者を当院救命救急センターまで搬送した。救命救急センター到着後、創部デブリードメントおよび舌断裂部の断端吻合を行った。処置前、気道確保のため気管内挿管を行い、血行再建のためアルプロスタジールファデクス120 $\mu$ g/dayを投与した。受傷翌日、吻合した舌は暗赤色で浮腫がみられた。ブリックテストでも血流が認められた事により、同日よりHBOを開始した。HBOは、3ATA・1時間、1日2回を4日間行った。この間、吻合した舌は暗赤色で、舌尖部の壊死が広がったが、舌背部はブリックテストでも血流がみられた。術後8日目、舌辺縁部の壊死組織の除去を行った。術後15日目より経口摂取を開始し、術後19日目に軽快退院となった。

【結語】本症例は、舌完全断裂のため皮弁による再建手術を要すると思われたが、HBOを併用することにより、構音障害を認めるものの、断裂舌の約1/3が保存され、この事により二次的再建手術を行う事なく日常生活が可能となった。